

『呼蘭河伝』の構成

工 藤 千夏子

— [抄 録] —

本稿の目的は、三十年代の作家である蕭紅の長編小説『呼蘭河伝』の構成からその作品世界を探るというものである。『呼蘭河伝』は、独立した章を並べ合わせたかのようなごく単純な構成を持つが、前半から後半へ、さらには一章ごとの手法の変化に着目すると、実際には非常に精緻で計算された構成である。一、二章は叙事的に町の風景、風俗を描いた文章である。三、四章は前章までの叙事的手法を受けつぎつつ、三人称描写から五章以降に共通の一人称描写に変わり、以降の章への橋渡しの役割を果たした。そして五章以降はそれぞれ短編小説として独立した形を取りながらも共通のモチーフが描かれている。さらに、作品全体を巨視的に眺めると、一貫して小説の遠景であるはずの作品舞台を主役とし、様々な手法、エピソードを用いてこれを描き出してきたことが判る。こうした技法によって、この小説の重層的で奥行きを持つ世界観は構築されている。

キーワード：構成、呼蘭河伝、蕭紅

はじめに

小説の構成とは読者の無意識に訴えかける物語であり、看過することのできない内容の一部分である。三十年代を中心に活動した女流作家蕭紅の長編小説『呼蘭河伝』において、構成という影のストーリーは作品世界を表現する上で大変重要な役割を果たしている。本稿は、左翼的、または抗日鼓舞の色彩の強い作品を多く残した作家の小説を、構成という技法の面から探ることを目的とする。

『呼蘭河伝』の作者蕭紅は辛亥革命の年黒竜江省に生まれ日本の中国侵略、偽満州国成立に伴い関内へ流れてきたいわゆる一群の“東北作家”の一人である。

三十一年間の短い生涯のうち、彼女は一か所に身を落ち着けることなく国内を流転すること

を余儀なくされた。『呼蘭河伝』は流浪の人生の終着点、香港で、一九四〇年に当時戴望舒が主編をしていた香港『星島日報』副刊『星座』上で、約四ヶ月にわたって連載された長編小説である。貧しい北の町、呼蘭河での人々の生活風景が克明に描かれ、矛盾をして「小説のようなものと言うよりは、もっと人を引きつけるもの：一編の叙事詩、一幅の色鮮やかな風俗画、一曲の物悲しい民謡である」と言わしめたこの小説には、全編を通して失われた故郷への懐念、寂寞感があふれている¹⁾。

しかし、構成の面から見ると、この小説は非常に特徴的で、前半と後半とで作品の手法が異なっており、ともすると、腰折れのような印象を与える。この構成の意図と、小説の内容にもたらす効果について検討して行く。

一章 小説舞台の前景について

『呼蘭河伝』は、全七章、それにエピローグから構成されている。始めの一、二章で、呼蘭河の社会に生きる人々の行動様式や、思考様式を詳細に描き、三章では「我」と祖父の二人の世界・「后花園」を描き、四章では、更に近づいた呼蘭河の人々の具体的な生活を、より近い視点で眺める。五、六、七章は、独立した物語である。筋書きとしては、この三つの物語は、一つの流れの中に位置している。

全体を通してみると、この小説は特異な構成となっている。この長編小説『呼蘭河伝』は、どのような構成になっており、作者の意図はどういったものであったのだろうか。様々な角度からの見方が可能である。この小説の構成から、作者の巧みな構成のしかけ、その小説にもたらす効果を見て行きたい。

この小説は、作者・蕭紅の生まれ故郷の呼蘭を舞台のモデルとし、幼少時代の思い出をベースにした物語になっている。

この七つの章は、時間の流れ、事件の経過に則して並んだ大きな一つの物語ではない。各々が一つのまとまりを持ち、完結した内容なのである。しかし、当然、一つ一つの章は、全く無関係というわけではない。それぞれが緩やかな関係で繋がっているのである。

物語の語り手である「我」は、必ずしも呼蘭河の社会の一員として一体化した存在ではない。彼女は孤独であり、異質である。それは彼女がまだ社会の成員となりうる年齢に達していないせいでもあり、また、社会の中心となる性別でなかったせいでもある。貧しい呼蘭河の社会において、地主という彼女の家庭環境も、周囲の人々の生活からいささかの隔たりを生み出している。家族の中で父母にすら重視されなかったという点もまた彼女の孤立感を深めている。後半、各章の主人公として登場する人々もまた、呼蘭河の社会からはみだした存在である。本来ならば社会の構成員となるべき彼らは、そこで社会との間に軋轢が生じる。主人公たちはこの社会に立ち向かい、あるものは現実に圧殺され、あるものはわずかな光明を見いだす。

成長して社会の構成員としての役割を果たさなくてはならなくなった「我」は、この現実から「逃荒」してしまう。

一体、この世界はどういったものだったのであろうか。一、二章では、執ように、様々な角度からこの世界を描くことに徹している。

第一章において、蕭紅は、呼蘭河の町の気候や風土を描くことに紙面を費やした。町は一年の多くが厳しい寒さと雪に閉ざされた外の世界から隔離されたかのような雰囲気である。

这寒带的地方，人家很少，不像南方，走了一村，不远又来了一村，过了一镇，不远又来了一镇。这里是什么也看不见，远望出一片白。从这一村到那一村，根本是看不见的。

雪に閉ざされた土地に象徴される呼蘭河がどんな世界であるのか。そこは冬の支配する閉鎖されたものさびしく暗い世界なのである。遅れた文化、そこには新しい息吹は伝わっては来ない。厳しい風雪だけでなく、古いこわばった掟もまた社会を締めつけている。

严冬一封锁了大地的时候，则大地满地裂着口。从南到北，从东到西，几尺长的，一丈长的，还有好几丈长的，它们毫无方向地，更随时随地，只要严冬一到，大地就裂开口了。

严寒把大地冻裂了。

等进了栈房，摘下狗皮帽子来，抽一袋烟之后，伸手去拿热馒头的时候，那伸出来的手在手背上有无数的裂口。

人的手被冻裂了。

彼らは土地と一体化して生きている。逃げようのない閉ざされた世界に住み、抗いようのない厳しい自然に取り巻かれ、土地に寄り添うことによって生き延びて行くのである。

この章において蕭紅は、これら呼蘭河の人々の土地に根づいた生活、思考様式を描き出して行くのである。『呼蘭河伝』は、まず彼らの社会の前景となっている部分をクローズアップすることから始まる。

以下の引用文は、なにもない町・呼蘭河の数少ない名所、はまり込んでしまうと容易に抜け出すことのできない“道の陥没”についての記述である。

一年之中抬东抬马，在这泥坑子上不知抬了多少次，可没有一个人说把泥坑子用土填起来不就好了吗？没有一个。

说拆墙的有，说种树的有，若说用土把泥坑来填平的，一个人也没有。

この道の陥没のせいで、馬や家畜は命を落とし、人間も命からがらここを通りすぎる。しかし、この不都合に対して彼らは打開していこうという考えは持たないのである。根本的解決策なしに、この問題を回避しようとするのである。

厳しい自然環境に圧迫され、なんとか日々をしのいできた彼らの生活の一端がここに描かれている。彼らは抵抗しようとはしない。ただ耐えるのみである。

しかし他方では、なにもない彼らの単調な生活の中で、こういったアクシデントは容易にちょっとした娯楽の要素となりうる。

总共这泥坑子施给当地居民的福利有两条：

第一条：常常抬东抬马，淹鸡淹鸭，闹得非常热闹，可使居民道短，得以消遣。

第二条就是这猪肉的问题了，若没有这泥坑子可怎么吃瘟猪肉呢？吃是可以吃的，但是可怎么说呢？真正说是吃的瘟猪肉，岂不太不讲卫生了吗？有这泥坑子可就好办，可以使瘟猪变成淹猪，居民们买起肉来，第一经济，第二也不算什么不卫生。

単調な生活の中で事件やアクシデントを楽しみにしてしまうという合理的な姿勢や、環境に対する順応性が、風刺的にユーモラスに描かれている。しかしまた同じ場面で、体面のみを重要視し、実質的なことに目を向けない人々の後進性や、こういった、他者の不幸を見ものにするという、人間の残酷で素朴な趣味、といった様々な人間の切り口を、蕭紅は映しとっているのである。

以下の部分でもまた、同様に様々な切り口を見ることができる。

被冬天冻裂了手指的，到了夏天也自然就好了。好不了的到 李永春 药铺，去买二两红花，泡一点红花酒来擦一擦，擦得手指通红也不见消，也许就越来越肿起来。那么再到“李永春”药铺去，这回可不买红花了，是买了一帖膏药来，回到家里，用火一烤，粘粘糊糊地就贴在冻疮上了。这膏药是真好，贴上了一点也不碍事，该赶车的去赶车，该切菜的去切菜。粘粘糊糊地是真好，见了水也不掉，该洗衣裳的去洗衣裳去好了。就是掉了，拿在火上再一烤，就还贴得上的。一贴，贴了半个月。

呼蘭河这地方的人，什么都讲结实、耐用，这膏药这样的耐用，实在是合乎在这地方的人情。虽然是贴了半个月，手也还没有见好，但这膏药总算是耐用，没有白花钱。

于是再实一贴去，贴来贴去，这手可就越肿越大了。还有些实不起膏药的，就拣人家贴乏了的来贴。

このエピソードでも、彼らの忍耐力がうかがえる。「结实、耐用」を一番に重要視するのは

やはり過酷な環境によって培われた我慢強い人間性、環境に適応する順応性の現れである。また、耐久性のみを重視し、効果は二次、という本末転倒した思考様式から、やはり文化から取り残され孤立した土地の後進性が読み取れる。

第一章において蕭紅は、人々の土地と一体化した生活やその人間性を浮き彫りにした。人間の生活習慣や行動様式を探る上で自然環境の影響は無視できない重要なファクターの一つである。過酷な環境であればあるほど、その影響は大きい。厳しい自然に対して人々は逃れ順応して行く術を憶える。

蕭紅は、こうした日常のほんのささいな出来事から、最も原始的にしてその人間のベースとなる特徴を描いた。この章で取り上げられるエピソードはどれもこれも当地のなんの変哲もない日常の一コマであったろう。その看過されがちな日常の様々の切り口から顔をのぞかせる人間の本性、それを蕭紅は丁寧に描写して行くのである。

第二章では、呼蘭河における伝統的な祭祀の行事を中心に描いている。あるものは幻想的で美しい光景により、あるものは胸に迫る旋律により、心の奥深くに入り込み刻みつけられる。しかし伝統祭祀の美しさも、呼蘭河の人々がどういように自分たちの中に伝統を取り込んで行くのか、利用して行くのかにポイントをおいて描いて行くのである。これらの精神生活がいかに美しいものであるのかを細かな筆致で描くのは、その人々に与える影響をよりリアルに伝えるためである。以下の引用は、神降ろしの巫女が太鼓を打ち、踊る場面の引用である。

这唱着的词调，混合着鼓声，从几十丈远的地方传来，实在是冷森森的，越听就越悲凉。听了这种鼓声，往往终夜而不能眠的人也有。

精神的人家为了治病，可不知那家的病人好了没有？却使邻居街坊感慨兴叹，终夜而不能已的也常常有。

满天星光，满屋月亮，人生何如，为什么这么悲凉？

美しい旋律が人々の心をとらえる様がありありと伝わってくる。

こうして伝統的な行事、またそれに付随する思想概念は易々と人の心に入り込み定着し、受け継がれて行く。そうして呼蘭河の人々は自然によって作り出された行動様式や性質と、伝統行事によって培われた文化とをうまく折衷させて生きて行くのである。

伝統行事が細かく写実的な筆致で絵画を思わせるような鮮やかさで描かれる。

その中の一つ、雨ごいをした年に、雨の恵みに感謝して神に奉納される野外舞台の描写があるが、舞台自身の描写はほとんどなく、呼蘭河の人々の舞台を鑑賞する様子が生き生きと描かれる。人々は舞台の内容そっちのけで、久しぶりに会った親戚と話をするのに忙しい。

一到了唱戏的时候，可并不是简单的看戏，而是接姑娘唤女婿，热闹得很。

野外舞台を口実にして、離ればなれになった肉親が再会したり、お見合いをしたりすることに利用している。これもまた呼蘭河の人々の順応性に長けた一面である。

また、道の陥没によって起こった事故を見物して楽しんでいた彼らは、神のお告げを聞く神降ろしもまた、娯楽の一つとして押し合い圧し合いして聞き入った。

人们又都着了慌，爬墙地爬墙，登门地登门，看看这一家的大神，显的是什么本领，穿的是什么衣裳，听听她唱的是什么腔调，看看她的衣裳漂亮不漂亮。

それとは逆に道の陥没を、神聖視する風潮もまた、彼らの中にはあった。

虽然马没有死，一哄起来就说马死了。若不这样说，觉得那大泥坑也太没有什么威严了。

こうして伝統行事によって迷信が生み出され、迷信を信じる心が新たな迷信を生み出して行くのである。彼らの非科学的な後進性はこの伝統文化に端を発するという一面での作者の解釈が描かれる。

そして呼蘭河の人々の中で外的要素である自然からの影響と、内的要素である、祭祀行事に代表される伝統文化の精神性は、複雑に絡み合い補いあって一つの人間性へと作り上げられて行ったのである。

そして厳しい自然によって培われた忍耐力は、時に彼らを極限まで追い込み、もの悲しい絶望の境地へと追い込む。

他们这种生活，似乎也很苦的。但是一天一天的，也就糊里糊涂的过去了，也就过着春夏秋冬，脱下单衣去，穿上棉衣来的过去了。

从早晨到晚上忙了个不休。夜里疲乏之极，躺在炕上就睡了。在夜梦中并梦不到什么悲哀的或是欣喜的景况，只不过咬着牙，打着哼，一夜一夜的就都这样的过去了。

抗いようもないものに耐え続けた彼らは進歩することや、抵抗する力を失ってしまう。それはまた人間の思考力の源でもあるが、それらを放棄してしまっているのである。

この特徴的な性質についてについて作者は五章で筆を揮い、遺憾なく人々の人間性を表現しているが、ここでも、複雑に絡み合った彼らの人間性の一端をうかがうことができる。

二. 小説全体の中で見た三、四章部分の役割

一、二章で蕭紅はこれからのいくつかの物語の遠景に当たる部分を描いた。三章になってようやくここから以降の物語の視点となる地主家庭の小さな女の子、「我」が登場する。「我」のそばにはいつも祖父がいる。

祖父はなにも仕事をしていない、実質的な権力や能力を持たないご隠居さんだ。「我」は、まだ社会の一員とはいえないような小さな子供である。また、家庭の中でも重要な地位にはいない女の子である。こういった社会の“はみ出し者”からのニュートラルな視点によって、更に呼蘭河の中の「我」の周囲小さな社会が細やかに描かれるのである。

三章においては、社会の中心から離れた存在である「我」の住む裏庭「后花园」、そこで過ごす「我」生活の様子が描かれる。「后花园」は、なんでも自由で、思うがままの世界である。

花开了, 就像花睡醒了似的。鸟飞了, 就像鸟上天了似的。虫子叫了, 就像虫子在说话似的。一切都活了。都有无限的本领, 要做什么, 就做什么。要怎么样, 要怎么样, 都是自由的。

この世界に一章で描かれた厳しい冬の気配はない。ここは永遠に春である。多分に童話的色彩を帯びており、呼蘭河の町があまりにも厳しい現実の世界であるのと対照的に、非現実的世界である。こういう視点を設定することによって、これ以後描かれる事件の主人公、町の人々、のいづれもと等間隔の距離を保つことができているのである。

四章は、散漫で叙事的であった一、二章に比べて的を絞ってきている。呼蘭河の社会全体ではなく、これからの物語のより狭い舞台となる、「我」の院子にに間借りする人々の具体的な日常生活を描き始めるのだ。この世界は三章の「后花园」とは対照的になんの希望もない暗い世界である。「私の家の前庭は荒涼としていた」というフレーズを繰り返し用い、けして豊かとは言えない普通の人々の困窮した暮らしぶりを畳みかけるようにして描いた。

他们看不见什么是光明的, 甚至于根本也不知道, 就像太阳照在了瞎子的头上了, 瞎子也看不见太阳, 但瞎子却感到实在是温暖了。

他们就是这类人, 他们不知道光明在那里, 可是他们实实在在的感得到寒冷就在他们的身上, 他们想击退了寒冷, 因而来了悲哀。

こうした、豊かでない院子の人々の、「荒涼」たる、荒れ果てて寒々とした、現実に対するあきらめ、諦観を、蕭紅は詳細に描いたが、こうして徐々に的を狭めることによって、よりはっきりとこれ以後の個人の物語と、呼蘭河の社会全体の関係性が浮かび上がってくることとなるのである。

構成の面からいえば、三、四章は言わば一、二章から五章以降への橋渡しの役割を果たしている。一、二章での小説の、淡々とエピソードを語ってゆく叙事的手法を受け継ぎつつ、五章以降の短い小説群の登場人物、舞台設定を設置していった。一、二章の小説の描かれ方と、五章以降の小説の描かれ方の、大きな差異を、この二つの章によって埋め、立体的世界に構成したのである。

三. 五章以降の短編小説群について

五章以降で、小説の構成は、大きな区切り目を迎える。

五、六、七章は、各々独立した章とはなっているが、ある一面から見れば、同じ流れの中に存在しているといえる。以降の三章の主人公、団円媳婦の少女、地主家庭に居候する大叔父の有二伯、貧しい粉引きの青年馮歪嘴子、の身に起こる事件は、それぞれ違った顛末を迎えるが、彼らは三人とも、伝統や習慣、呼蘭河の社会を構成している要素に意識的、無意識的に外れ、反発する者であるという共通点を持っている。

そして、もうひとつ注目すべき五、七章の大きな特徴として、この各々の物語の主人公と同じくらいに、周囲の人物像に注意を払い、紙枚を割いているということも挙げられる。

一、二章で、小説の前景となるはずの呼蘭河の多くの人々の生活や精神性の実態を執拗に描いた。しかし、これは以後の小説の後半でも一貫した一つの大きなテーマとして進行して行く。

五章の大まかな筋書きは、金で買われてきたまだ幼い嫁、団円媳婦が、団円媳婦らしくない行動を取るとして皆で教育、折檻し、ついには、まじないや神降ろしをし、狐憑きだとして霊を払うために熱湯につけて殺してしまう。というものである。

“ 见人一点也不知道羞。”

隔院的杨老太太说：

“ 那才不怕羞呢！头一天来到婆家，吃饭就吃三碗。”

周三奶奶又说：

“ 哟哟！我可没见过，别说还是一个团圆媳妇，就说一进门就姓了人家的姓，也得头两天看看人家的脸色，哟哟！那么大的姑娘。她今年十几岁啦？”

“ 听说十四岁么！”

“ 十四岁会长那么高，一定是瞒岁数。”

彼女は熱湯につかることによって団円媳婦らしくない振る舞いをする原因である“きつね”をお払いすることになってしまう。

団円媳婦らしさを求める周囲の人々の前に子供らしい自然な態度すら許されない古くからの

婚姻制度の習慣に、幼いために無意識のうちに反抗した少女は、周囲の人々、取り巻く呼蘭河の社会の現実の力により孤独な犠牲となるのである。

果然的，小团圆媳妇一被抬到大缸里去，被热水一烫，就又大声的怪叫了起来，一边叫着一边还伸出手来把着缸沿想要跳出来。这时候，浇水的浇水，按头的按头，总算让大家压服又把她昏倒在缸底里了。

这次她被抬出来的时候，她的嘴里还往外吐着水。

于是一些善心的人，是没有不可怜这小女孩子的。

残酷なこの仕打ちを、人々は涙を流しながらも、何の疑問もなく行ってしまう。結果は明白であったこの行為に、善意でいっぱいの彼らは一致団結して臨む。しかし彼らは昏倒した少女を目の当たりにして驚き慌て、急いで少女を救おうとするのである。この行為は矛盾しているかのように見える。少女のお姑さんの行為も、周囲の人と同じく、矛盾して見える。

做婆婆的打了一只饭碗，也抓过来把小团圆媳妇打一顿。一中略一

打狗，她怕把狗打跑了。打猪，怕猪掉了斤两。一中略一

她又不会下蛋，反正也不是猪，打掉了一些斤两也不要紧，反正也不过秤。

团圆媳妇の家庭内での地位は大変に低く猫や犬、家畜に劣るような扱いである。しかし少女が死ぬかもしれないという時になっては、自分が死ぬ思いで貯めたなけなしの金を潔く出してしまうのである。

于是她心安理得的把五十吊钱给了人家了。是她秋天出城去在豆田里拾黄豆粒，一共拾了二升豆子卖了几十吊钱。在田上拾黄豆粒也不容易，一片大田，经过主人家的收割，还能够剩下多少豆粒呢？而况穷人聚了那么大的一群，孩子，女人，老太太……你抢我夺的，你争我打的。为了二升豆子就得在田上爬了半月二十天的，爬得腰酸腿疼。

残酷な虐待を繰り返した少女に対して、自分たちが苦勞してためた大金を潔く差し出すというこの大きな矛盾はどこに端を發するものであろうか。これは、一、二章で語られた物語の前景に大いに関係する。

この呼蘭河という閉鎖社会にでき上がった“掟”は、人々の精神をがんじがらめにし、これほどの矛盾を感じさせないように麻痺させてしまっているのである。

”那可吃不得呀！吃了过不去两天就要一命归阴的。”

(团圆媳妇的婆婆说：

”那可怎么办呢？”

(那个人就慌忙的问：

”吃了没有呢？”

(团圆媳妇的婆婆刚一开口，就被他家的聪明的大孙子媳妇给遮过去了，说：

”没吃，没吃，还没吃。”

これは、少女の“狐憑き”に効く薬の処方の人から聞いて飲ませたものの、実は、毒を飲ませてしまっていたと知る場面である。少女を救うため必死になっている一方で、毒であったと知るや、皆の前で飲ませていないと嘘をつきその場を収めることを優先させてしまう。このように“掟”という精神的束縛のなかで矛盾をうまく丸め込んでしまうための非科学的合理性を持ち合わせている者が“聡明”ということなのである。

(于是人心大办振奋，困的也不困了，要回家睡觉的也精神了。这来看热闹的，不下三十人，个个眼睛发亮，人人精神百倍。看吧，洗一次就昏过去了，洗两次又该怎样呢？洗上三次，那可就不堪想像了。所以看热闹的人的心里，都满着秘密。)

人の不幸を見物して娯楽とする残酷性はここでも顔を出している。祭祀、迷信を信じる伝統の力によって少女虐待の残酷性は善美に姿を変えて肯定され人々の見物に供されるのである。

そして、五章の中で、少女の描写にもまして、力を入れているのは、やはり周囲の人々の行動や思考である。

团圆媳婦の病を治すために、くじ引きで占うというインチキ道士に、法外な治療費を払うこととなったお姑さんの心の葛藤に、团圆媳婦自身の心理描写よりはるかに多くの字数を費やしているのもやはり注目すべき点である。

成長して呼蘭河の社会の一員となるべく“教育”された少女は、その幼さゆえ社会に入ることを無意識のうちに拒んだ。しかし、社会に入ることを拒めば“死”が待っていたのである。

六章でも、この社会からはみ出した人物が登場する。作品舞台となった地主家庭の、建て前は大叔父、実質は作男の有二伯である。六章は有二伯の日常の短いエピソードを継ぎ接ぎしてでき上がっており、一貫した筋道はない。この人物の話は蕭紅はよほど書きたかったのではないだろうか、五章以降の三つの物語のうち他の二つは、どちらかといえば周囲の呼蘭河の人々を際立たせるための物語という側面が強かったのと比較して、明らかに有二伯を描くことに力を入れている。しかし、三つの章の流れとして見ると、やはり一貫し、発展して行くテーマのなかに位置している。これは非常に巧妙なしかけのある構成といえる。

この章の短いエピソードの一つ一つの始めには、必ず“有二伯真古怪”という「我」の評が入る。“古怪”とは、常にメンツを潰されるという抑圧された彼の心理状態がそうさせるのである。

有二伯は、たしかに他の呼蘭河の住人と比較して変わっている。人々が、あきらめきって何の疑問も持たずに生きている現実社会に対して不満を持ち、矛盾に反発する心を持っているからである。

你二伯虽然也长了眼睛，但是一辈子没有看见什么。你二伯虽然也长了耳朵，但是一辈子也没有听见什么。你二伯是又聋又瞎，这话可怎么说呢？

彼の抑圧された心境を吐露した一節である。現実を見つめる目はあるけれども、自分の思うようにならない世界に対して目をつぶり、耳を塞ぎ、おしのように黙って暮らすほかはない。

有二伯虽然作弄成一个耍猴不像耍猴的，讨饭不像讨饭的，可是他一走起路来，却是端庄、沉静，两个脚跟非常有力，打得地面冬冬的响，而且是慢吞吞的前进，好像一位大将军似的。

彼はまた、非常にメンツを重んじ、あたかも、大將軍のように誇りを失っていない人物である。それゆえメンツを常につぶされるという現実の中で、ますます“真古怪”な行動を取ることになるのである。

有二伯は、目下の者には常に自尊心を高く持ち、自分の弱みや、醜態を見せないよう細心の注意を払っている。

他说：

“有 不敢的，你二伯就是亏心事不敢做，别的都敢。”——中略——

我还是问他：

“你可怕？”

他说：

“怕什么”

我说：

“那毛子进来，他不拿马刀杀你？”

他说：

“杀又怎么样！不就是一条命吗？”

しかし、目上の者、例えば有二伯の兄に当たる「我」の祖父の前では、弱音を吐き、醜態を

晒すのである。

不知怎么的，他一和祖父提起跑毛子来，他就胆小了，他自己越说越怕。有的时候他还哭了起来。说那大马刀闪光漂亮，说那毛子骑在马上乱杀乱砍。

結局やはり彼は弱い人間なのであるが、その自尊心のため常に自らの弱点を隠し込んでいるのである。これも周囲が有二伯を「奇怪」と感じる要因なのである。

次の第七章においても、主題として五章からの流れの中に位置するものが在る。

七章の主人公は貧しい粉引の青年・馮歪嘴子である。この青年は、元々は己を守って分に安んずるといふ謙虚な人物である。しかし事件は果敢にもそういった人物が古くからの婚姻制度に反して自由恋愛によって結婚をしたところに端を発する。

これはメンツを重んじる有二伯と好対照といえる。そして、誇り高い有二伯が、不満や矛盾を抱えたまま己を曲げて蟄居しなければならなかった一方で、この現実にあまり敏感でない謙虚な青年が旧来の掟を打ち破ったというのは、皮肉な展開である。

馮歪嘴子は外界に対して非常に鈍感である。自己の身の回りのことのみを黙々とやり、その他のことを気にかけることがない。

他和馮歪嘴子谈天，故意谈到一半他就溜掉了。因为馮歪嘴子隔着爬满了黄瓜秧的窗子，看不见他走了，就自己独自说了一大篇话，而后让他故意得不到反响。一中略一

等他发现了老王早已不在花园里。他这才又打起梆子来，看着小驴拈磨。

彼の世界に春はない。彼の住まいは后花园のすぐ真後ろで、窓を開ければすぐに庭を見渡せるはずなのだが、窓は完全にキュウリのつるに埋め尽くされ、完全に二つの世界は離れてしまっている。冬が訪れ、窓枠についたつるが完全に枯れ落ちてしまうと、ようやく「我」は、馮歪嘴子の生活を見ることができる。

自由恋愛で結婚したことで周囲の非難にさらされても、嚴冬の中家を追い出されても、馮は不平を漏らさずじっと耐えるのみである。

周囲の人々は騒然とし、社会の枠からはみ出した馮歪嘴子の破滅を今か今かと見守っている。

呼蘭河城里是凡一有跳井投河的，或是上吊的，那看热闹的人就特别多，我不知道中国别的地方是否这样，但在我的家乡确是这样的。

其实那没有什么好看的，假若馮歪嘴子上了吊，那岂不是看了很害怕吗！

娯楽のない呼蘭河の人々が、人の不幸を見物して娯楽とするというシーンが、ここでも描かれる。この素朴で残酷な人々の習性が、五章では少女殺しの片棒を担いだ形になった。しかし、この横やりをもともせず、馮歪嘴子と子供は、しっかりとした足どりで生きて行くのである。現実には鈍感であるがゆえに、馮は、自らの仕事のみを見つめて生きて行けるのである。己の分に安んじるという生き方が新しい道を切り開いたのである。

到后来大家简直都莫明其妙了，对于馮歪嘴子的这孩子的不死，别人都起了恐惧的心理，觉得，这是可能的吗？这是世界上应该有的？

社会からはみ出して生きて行けるはずがない、と人々は動揺する。彼らはこれまで存在した社会の拘束に矛盾や理不尽を感じたことはない、抵抗することを知らない人間なのである。そういう彼らは、社会の枠組みからはみ出した馮歪嘴子が、破滅せず、彼の前に自分たちが考えたこともない道が開けていることに動揺するのである。

だんだんと子供が育つにつれ、呼蘭河の人々の態度にも変化が現れる。

馮歪嘴子，这肉丸子你不能吃，你家里有大少爷的是不是？

于是人们说着，就把馮歪嘴子应得的那一份的两个肉丸子，用筷子夹出来，放在馮歪嘴子的旁边的小碟里。

今まで呼蘭河の人々を縛っていた精神的束縛がわずかに揺らぐ様が判る。停滞していた空気が動く雰囲気である。人々は、従来通りではない生き方を受け入れ始めているのである。

ある一つの面からは、蕭紅は小説の後半、社会からはみ出し者を三様に描き出したといえる。一つは、厳しい現実に圧殺され、そしてその拘束力により、社会の中で生きている者をも不幸にする様を描いた。もう一つは挫折し、絶望の中、頭を低くし生を盗んで生きて行く様を描いた。そしてもう一つは正面から打ち当たり、わずかな光明を見いだした者を描いた。この三者を描き分けたところにも、この小説の構成の、計算された一面がある。

四. 結論

一章から順を追って見てきたが、すくなくとも、この小説は、平面の物語ではない。奥行きを持った、立体の世界である。一、二章では、叙事的に、呼蘭河の町の風景、風俗、住人たちの人となりを描き出し、それぞれが一幅の絵画の様になって眼前に浮かびあがってくるような描写である。それに続く三、四章では、更に近づいた農村の細密画を描いた。この三、四章で

は前章までの叙事的な手法を引き継ぎ、展開させながらも、五章以降の“短編小説群”の定点となる「我」を登場させ、以降の部分への橋渡しの役割を果たさせた。一、二章の手法と、五章以降の全く異なる手法が立体的、多面的に組み立てられるために、三、四章の果たした役割は非常に大きいといえる。そして、五章以降の内容は、呼蘭河の伝統慣習に意識・無意識的に外れ反発するものという共通項を持った主人公が各々登場する。そして、最初の物語で主人公は周囲に受け入れられずに死に、次の主人公は反発しきれず蟄居してしまい、最後の主人公は、未来にわずかな希望をつなぐ。こうした三つの章の中での一貫した構成、テーマが備わっているのである。これに加え、一章からの展開として、背後の人々呼蘭河の名のない無数の人々、彼らのもつ世界を主人公として描くという一貫した構成がある。一、二章で正面から呼蘭河の世界を描き、五章以降では、いわば裏側から、世界をより鮮明に浮きたたせるために、エピソードを積み重ねており、全体を通して眺めると遠景となるはずの「我」や主人公たちを取り巻く呼蘭河に生きる無数の人々が前面に浮かび上がってくるのである。

終わりに

『呼蘭河伝』は特異な構成を持った小説であった。そしてこの構成によって様々な異なった角度の見方をすることが可能である。大きくは、一、二章で描いた人々の行動様式や、呼蘭河の風俗、伝統を前景として、後半、ここの物語が発展して行くという方向性にも発展しているし、一貫したテーマとして、前景として描いた呼蘭河という土地に住む多数の人々を主人公とし、より彼らを克明に描き出すために個々の物語を存在させる、という方向性に発展してゆく小説と解釈することも出来る。こうした小説に仕掛けられた平面的でない交錯した構成により、この小説は素朴な断片的な章を重ねた小説のように見えながら、短編小説群では表現し得ない世界を構築している。重厚な世界を持ち、全体として物語というよりは重層的で立体感を持った絵画の様な趣を備えているのである。

〔注〕

- (1) 茅盾《论萧红的〈呼兰河传〉》(《文艺生活》1946年12月号。後、1947年6月上海环星书店より出版された本に序として収録)

〔付記〕 本稿は1998年10月哈尔滨出版社発行の《蕭紅全集》を底本としている。

(くどう ちかこ 文学研究科中国文学専攻博士後期課程)

(指導教授：吉田 富夫教授)

2002年10月16日受理